

先進的建築生産学ぶ

マレーシアの私立大学 U T A R 招きWS

芝浦工大

芝浦工業大学は、東京都港区の芝浦キャンパスでマレーシアの私立大学「トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学

(UTAR)」を招き、9月23-29日にワークショップ「第5回Construction management & Workshop」を開いた。芝浦工大の蟹澤宏剛教授は「建築生産系のWSはほかには例がないのでは」と話した。



WSに参加した学生ら



五輪後の施設活用を提案

日本で開催するのは2度目。参加したのは芝浦工大の蟹澤教授、志手一哉教授と学生(2-3年生)17人、UTARの環境工学部コンストラクションマネジメント(CM)学科の3年生10人と講師のタ

ン・ツイーさんのほかサポートの学生ら34人。「WSに参加した学生同士、その後もLINEなどで交流が続いている」など、良い効果を生み出している。

WSは、建設技術の急速な発展が見込まれるマレーシアで、日本の先進的な建設技術に興味を持つ優秀な学生を招いて、建築技術者を育成するとともに、芝浦工大建築生産系研究室の学生と建築生産分野の新しい技術を学び、お互いの建築生産に関する知識を高め合う交流を促進することが目的。

マレーシアやその隣国であるシンガポールでは日本のゼネコンが超高層ビルを多く手掛けていることに加え、経済発展に伴って住環境の改善が求められていることもあり、CM学科で施工管理を専門に

学ぶUTARの学生の日本の建設技術に対する関心は極めて高い。こうした背景から、建築生産系研究室では、2016年から定期的にUTARの環境工学部を訪問し、UTARの学生と建築生産を学ぶWSをこれまで4回開催している。次回は来年5月ごろにマレーシアで開催する。

今回のWSでは清水建設の技術研究所、鹿島と戸田建設の施工現場を見学し、日本の建設技術に関する知見を深めた。

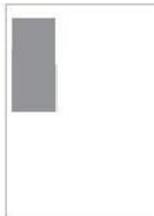
また、江東区有明の東京五輪施設の工事現場について施設計画や施工技術に関する事前調査と実際に現地を訪れ、五輪後の施設の利活用についての提案などを5グループに分かれて発表した。最後に志手教授から参加者に修了証が手渡された。

19年1月30日現在の正規学生総数は1万8440人、専任の教員数は1146人。9学部に4つのセンター、3つの研究所で110以上の学術プログラムを持ち、多様な分野で研究と学術的發展を促進することにも力を注いでいる。企業からの卒業生に対する評価も高く、日系企業に就職している卒業生も多い。

UTARは、質の高い教育を提供する非営利私立大学として02年8月にUTAR教育財団の下で設立された。創立16年という浅い歴史にもかかわらず、英タイムズ・ハイアール・エデュケーションの世界大学ランキング2019で501-600位、アジア大学ランキング2018で99位に格付けされるなどマレーシア有数の私立総合大学となっている。

UTARは、質の高い教育を提供する非営利私立大学として02年8月にUTAR教育財団の下で設立された。創立16年という浅い歴史にもかかわらず、英タイムズ・ハイアール・エデュケーションの世界大学ランキング2019で501-600位、アジア大学ランキング2018で99位に格付けされるなどマレーシア有数の私立総合大学となっている。

UTARは、質の高い教育を提供する非営利私立大学として02年8月にUTAR教育財団の下で設立された。創立16年という浅い歴史にもかかわらず、英タイムズ・ハイアール・エデュケーションの世界大学ランキング2019で501-600位、アジア大学ランキング2018で99位に格付けされるなどマレーシア有数の私立総合大学となっている。



芝浦工大 建築生産技術で交流 マレーシアの学生と合同WS

芝浦工業大学とマレーシアのトウンク・アブドゥル・ラーマン大学(UTAR)で主に建築生産技術を学ぶ学生が交流する合同のワークショップ(WS)が9月23～29日に行われた。東京都江東区にある芝浦工大豊

洲キャンパス周辺で建設中の五輪関連施設を見て回り、技術や五輪後の利用方法などを考察した研究成果を最終日に全編英語で発表した。両大学は2016年から建築生産技術に興味を持つ

た学生が相互訪問し、知識を高め合うWSを開いている。日本での開催は2回目。芝浦工大は建築学部



最終日の成果発表は9月29日、芝浦工大豊洲キャンパス内で

生産系研究室(蟹澤宏剛教授、志手一哉教授)に所属する17人、UTARからは環境工学部コンストラクションマネジメント(CM)学科に所属する10人が参加した。

学生らは有明アリーナや有明体操競技場、有明テニスの森公園などの施設を視察し、屋根をリフトアップする技術など工事の内容をレポートにまとめた。五輪後の施設利用では、子どもを対象にした施設やネット通販大手が利用する物流施設といった研究成果を発表した。

発表後に蟹澤教授はラグビーに例え「へ一人はみんなのために、みんなは一人

のために」という精神は、皆さんが学ぶCMに通じる」と述べ、今後の活躍に期待した。UTARの学生を引率したタン・ズイー・イー講師は「学生たちは日本の現場が整理整頓され、安全で心地よいことに強い印象を持ったよつだ」と話した。次回はマレーシアでワークショップを開く方向で調整する。

